

【令和元年度実績】

1. SDGs 学構築に向けた取り組み

No.01 ①-1 現代的課題に挑戦する基盤となる先端的・創造的な高度教養教育の確立・展開

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

計画

国連が提唱する持続可能な開発目標(SDGs)に関わる取り組みとして本研究科は平成30年度に大規模なシンポジウムを開催した(「持続可能な開発目標(SDGs)とグローバル人材の育成」)。このシンポジウムを通して、SDGsは単なる国、地方自治体、企業、公的機関などによる社会的な活動としてだけでなく、大学における研究・教育の対象となることがわかった。本研究科は今年度から2つ目の国際学位プログラムとして「グローバルガバナンスと持続可能な開発目標」プログラムを立ち上げているが、ここでの研究成果を取り入れた新しい学問領域としての「SDGs学」の構築を目指す。大学における高年次教養教育や高大連携教育にSDGs学の普及を目指す。

上記の目標達成のために、今年度は種々の講演会、シンポジウムを開催し、国内外の研究動向を調査しつつ、高校への出前授業やオープンキャンパスでの高校生を対象とした公開講義を実施する。

さらに、SDGs未来都市に指定されている東松島市を対象に、産学官連携(東松島市・Dow Chemical(プラスチック原料メーカー)・青南商事(廃プラリサイクル業者))によるSDGs教育(小学校への出前授業)を実施するとともに、総合学習としてSDGs教育を実施している宮城県白石高校の教育支援を行う予定である。

将来的には、現在検討中の全学教育の改革とも歩調を合わせながら、学部高年次学生を対象とする、一定の単位取得者にある種のサーティフィケートを発行するような教育のあり方を探る。

実績報告

○東北大学の教育の国際化に貢献すべく研究科2つ目の英語を教授言語とするコースである「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラム(G2SD)を2019年(平成31年)4月に立ち上げた。グローバルガバナンスと持続可能な開発という相互に関連した人類の共通課題に立ち向かう能力を、批判的な理論検証と問題解決型の研究を通じて育成することを目的としている。特に、2015年の国連サミットで定められた持続可能な開発目標(SDGs)の達成に貢献する人材の養成を目指している。同コースは東北大学 Future Global Leadership プログラムの認定を受けている。

○「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムは『東洋経済 ACADEMIC — SDGs に取り組む大学特集』(2020年7月9日)における東北大学の紹介記事の中で人材育成取り組みとして紹介されている。

▷ 世界各国から多様な文化や経験を持つ学生が集い、
人類の共通課題に立ち向かう能力を養う

[東北大学大学院国際文化研究科 グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム]

国際文化研究科が2019年度より開講している「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム(G2SD)」。分野横断的な学際教育プログラムで、「グローバルガバナンス」「持続可能な開発」という国際社会が直面している課題解決に取り組む。プログラムは高い専門性と豊富な実務経験を持つ教員によってすべて英語で実施され、批判的な理論の検証と問題解決型の研究によって広い視野で国内外における諸問題の解決能力を養うことを目指す。



○2019年(令和元年)度は前期課程に3名、後期課程に1名の入学者があった。また志願者はそれぞれ6名と2名であった。

○同プログラムの土台となる研究の国際連携を図り、かつ社会貢献の取組として以下の2件のワークショップ・シンポジウムを開催した(詳細は[添付 1]SDGs 関連ワークショップ・シンポジウム(2019年度).pdf)。1件目は学外からの参加者を含め55名の出席者があり、アンケート回答者(36名)の72%が「とても興味深かった」、28%が「とても興味深かった」と回答し、好評であった。特に学外者に本研究科の取組をアピールする効果があった。2件目は、52名の出席者のうち企業から6名、高校教員1名、その他学外者4名、学内他部局から4名の参加者があった。2日目に学生の研究発表を組み入れたことにより所属学生に対して通常の講義では得られない教育効果があった。

[1] 第6回 G2SD-SDGs ワークショップ(2019年10月11日)

末吉 竹二郎 氏(国連環境計画・金融イニシアチブ(UNEP FI) 特別顧問)
「SDGsとパリ協定が動かすビジネス」

[2] 第1回 G2SD-SDGs 国際シンポジウム: 日本とグローバルガバナンス(2019年12月13日～14日)

(講演1) Hugo Dobson (Sheffield University)
”Global Governance, a ‘Gaggle of Gs’ and Japan”

(講演2) 金暎根(高麗大学)
「日韓『SDGs(持続可能な)和解学』を始めよう—科学技術・人文・社会融合的『災難・安全共同体』構築に向けた提言—」

○「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムは文部科学省により「教育現場におけるSDGsの達成に資する取組 好事例」として取り上げられている([添付 2]国立大学法人東北大学大学院国際文化研究科: 文部科学省.pdf)。

○代表教員は一般社団法人SDGsとうほく主催の「なりたい東北 2030」(2019年7月27日)及び仙台防災未来フォーラム「SDGsと仙台防災枠組」(2019年11月10日)というイベントに招待され、本研究科のSDGsに関わる教育の取組を紹介した。「なりたい東北 2030」の様子は河北新報に取り上げられ、社会的関心が高いことがわかる。([添付 3]SDGsとうほくイベント.pdf) ([添付 4]「SDGsとうほく」河北新報オンラインニュース.pdf)

○代表教員は、第12回アジア自動車環境フォーラム(本研究科共催)において基調講演を行った(2019年10月29日、30日)。イベントの様子は業界紙に紹介され、業界団体の関心の高さがわかる([添付 5]12th AAEF 紹介記事.pdf)。

第 12 回アジア自動車環境フォーラム(共催):自動車リサイクルにおける SDGs の実現に向けて(2019 年 10 月 29 日~30 日)

基調講演

劉 庭秀(東北大学大学院国際文化研究科)

"Automobile Recycling Industry in the New Era; Toward the Trend of CASE and SDGs"

○産学官連携による SDGs 教育を実施しており、2019 年度は SDGs 未来都市「東松島市」の赤井小学校で、廃プラ問題をテーマに世界最大のプラスチック原料メーカーの「Dow Chemical 社」と共同で出前事業を実施した(2019 年9月 24 日)。地元紙に取り上げられ、社会的関心が高い取組ということが出来る([添付 6]赤井小学校出前授業_石巻日日&石巻かほく.pdf)。

○宮城県立白石高等学校の SDGs 教育(総合学習)を支援しており、本研究科教員による出前授業、研究調査方法とポスター作成の指導、発表会の総評などを行った([添付 7]白石高校ウェブサイトから.pdf)。2019 年4月 24 日に実施した出前授業では、教員から「(前部省略)SDGs の解説では、さまざまなデータを用いてデータのエラーを見抜き、客観的科学的に事象にアプローチしていこうとする学究姿勢は生徒たちにも大変興味深く感じられたようです。」という評価を得た。2019 年 10 月 28 日と 2020 年1月 27 日には、教員と大学院生が赴き、研究方法の指導や発表会の総評などを行なった。高校教員からは「大学の先生や大学院生の感想やアドバイスを聞いて、ある一つの題材について考えるときも、視野を広く持つことで達成でき考慮すべき SDGs の項目が増えていくと感じた。」「生徒と比較的、年齢の近い修士の学生による講評が生徒に響いているように感じた。」という評価を得た。

○2019 年7月 30、31 日の東北大学オープンキャンパスに合わせて、高校生向けの模擬講義及びミニ講演会を開講した([添付 8]オープンキャンパス講義.pdf)。アンケートでは参加した高校生から、以下の感想があった。SDGs の啓発に資した。












「国際的な問題を解決したいな、とは思っていたのですが、いまいち具体的なことがつかめずにはいましたが、今日は SDGs 入門の講演を聞いて、なるほど！と自分の夢を決める糸口のようなものがつかめました。」(福島県, 高校生)

「ミニ講演会のみでの参加でしたが、[講演者]のご活躍されている様子を伺い、私も海外に飛び出して広い視野で社会問題に取り組んでいきたいと強く願望する気持ちを思い出せました。刺激になりました。」(岩手県, 高校生)

「講座についてなのですが、SDGs について全く知らなかったのですが、詳しく知れてよかったです。興味が湧きました。」(福島県, 高校生)

○本研究科教員(劉 庭秀教授)は、東北大学「プラスチック・スマート」推進宣言に基づいて設置された「プラスチックスマート戦略のための超域学際研究拠点」に参画し、そのキックオフイベントである「サイエンスアゴラ in 仙台 2019 & 東北大学 SDGs シンポジウム」の第3セッションで基調講演「研究の最前線:廃プラ問題と国際資源循環—持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けて—」を行った([添付 9]東北大学 SDGs シンポ.pdf)。本学の SDGs 活動のアピールの一助となった。

○「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムの教員 3 名(内 1 名が研究代表者)が参画する国際研究プロジェクト「遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築—HEV の有効利用策—」が科研費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 (B))に採択された([添付 10]遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築—HEV の有効利用策— (KAKENHI-PROJECT-19KK0272).pdf)。

 [添付 1]SDGs 関連ワークショップ・シンポジウム(2019 年度).pdf,  [添付 2]国立大学法人東北大学大学院国際文化研究科:文部科学省.pdf,  [添付 3]SDGs とうほくイベント.pdf,  [添付 4]「SDGs とうほく」河北新報オンラインニュース.pdf,  [添付 5]12th AAEF 紹介記事.pdf,  [添付 6]赤井小学校出前授業_石巻日日&石巻かほく.pdf,  [添付 7]白石高校ウェブサイトから.pdf,  [添付 8]オープンキャンパス講義.pdf,  [添付 9]東北大学 SDGs シンポ.pdf,  東洋経済_国文研 2.png,  [添付 10]遊牧民のエネルギー・環境問題の実態解明と持続可能性の再構築－HEV の有効利用策－ (KAKENHI-PROJECT-19KK0272).pdf

2. University College London との第2言語習得に関する国際共同研究の推進

No.21 ①-3 国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進

No.42 ①-3 グローバルネットワークの形成・展開

No.46 ③-1 国際通用性の向上

計画

本研究科附属の言語脳認知総合科学研究センターに所属する教員が中心となり、第2言語習得の国際共同研究を実施する。本研究科の鄭嫣婷講師が中心となり、UCL の Kazuya Saito 准教授、Andrea Revesz 教授、及びロンドン大学バーベック校の Adam Tierney 講師とともに効果的な第2言語習得に関わる認知過程の解明を目指す。年度当初に公開シンポジウムを開催し、その後は日本もしくは英国において外部資金獲得を視野に入れつつ、中長期的な国際共同研究体制を構築する。

実績報告

○東北大学が実施しているユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)との研究活動の連携に資する取組として、**2019 年(令和元年)度より本研究科附属言語脳認知総合科学研究センター所属の教員(鄭 嫣婷准教授)とその研究グループが加齢医学研究所の研究者と共に英国の研究者グループ(代表:Dr. Kazuya Saito (UCL))と共同研究を開始した。**






○外国語学習の神経認知基盤を明らかにし、より効果的、効率的な外国語学習の方法を開発することを目的としている。脳科学と外国語教育の学際研究により、**personalized foreign language learning(個別化外国語学習)の確立を最終的な目標とする。**

○英国の Economic and Social Research Council (**ESRC**)の補助金を獲得し活動している([添付 1]ESRC Principal Investigators.pdf)。

○2019 年度はキックオフイベントとして、**4月に東北大学で、12月にUCLで関連するシンポジウムを開催した**([添付 2]シンポジウム 20190424 ポスター.pdf、[添付 3]シンポジウム 20191203&04 プログラム.pdf)。4月のシンポジウムには、学外の英語教育及び第2言語習得の研究者や学生を含め 60 名の参加者があった。シンポジウムの模様は Facebook 上でビデオ配信され、495 回の再生回数がある(2020 年2月 19 日時点)。12 月のシンポジウムも同様に Facebook 上でビデオ配信され、528 回の再生回数がある(2020 年2月 19 日時点)。関心が高いことがわかる([添付 4]201904&12_symposium_facebook.pdf)。

○成果として、研究グループに所属する本研究科の**学生による査読付き論文2編、学会発表7件、国際シンポジウムでの発表3件、及び教員による論文1編、招待講演6件**がある([添付

5]UCL 共同研究成果_20194-20203.pdf)。特に、学生の国際的な研究能力の向上にも資している。

 [添付 1]ESRC Principal Investigators.pdf,  [添付 2]シンポジウム 20190424 ポスター.pdf,  [添付 3]シンポジウム 20191203&04 プログラム.pdf,  [添付 4]201904&12_symposium_facebook.pdf,  [添付 5]UCL 共同研究成果_20194-20203.pdf

3. 日本学研究における海外の有力大学との提携

No.21 ①-3 国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進

No.42 ①-3 グローバルネットワークの形成・展開

No.46 ③-1 国際通用性の向上

計画

本研究科の国際日本研究講座、及び本研究科が参画している日本学国際共同大学院の国際的な教育・研究のさらなる推進を目指し、新たにシカゴ大学(THE 世界大学ランキング 2019 年度第 10 位)及びタマサート大学(タイ)との提携を目指す。

シカゴ大学との連携については、平成 30 年度に開催した日本学学術会議に同大学歴史学科・東アジア研究センターのケテラー教授を基調講演者として招待したことを契機に、本年度はまず東北大学とシカゴ大学、東京大学の3校の研究者・学生による研究会を東北大学で開催する(令和 2 年 3 月の予定)。将来的には、国際的な学術交流、共同研究、学生派遣の体制を構築する。

タマサート大学との連携については、同校及びタイ国内で同校と連携している国立行政開発学院(NIDA)が新たに日本研究における博士課程を設置することに伴い、先方は日本での提携機関を探しているところである。本研究科は従来から研究者の相互派遣を実施してきた経緯があり、今後は博士課程学生を含めた相互交流の体制を構築する。令和元年度は、その手始めにタマサート大学において、本研究科とタイの2機関が日本研究国際シンポジウムを共同開催し、本研究科から教員と学生を派遣する。最終的には部局間学術交流協定を結び、相互に派遣学生の学位取得に向けて研究指導を行える仕組みを構築する。

実績報告

○本研究科は国際日本研究講座を中心に研究科独自の日本研究及び教育活動を推進している。その特色は、日本の諸々の特徴を国際的な視点から考察するということである。2019 年(令和元年)度から、国際研究ネットワークを拡充する取り組みとして、シカゴ大学(米国)及びタマサート大学(タイ)との連携を開始した。シカゴ大学とは 2020 年(令和2年)3月に東北大・シカゴ大・東大の3校による国際ワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症パンデミックにより次年度に延期した。タマサート大学とは現在、先方の教養学部との部局間学術交流協定締結に向けて検討中であるが、2020 年(令和2年)2月にキックオフイベントとしてシンポジウムを開催した([添付 1]タマサート東北 NIDA シンポジウム報告.pdf)。いずれも、双方の学生の相互訪問を可能にし、本研究科の学生には国際的な研究経験を積ませることを目的としている。

* タマサート大学教養学部との部局間学術交流協定は 2020 年 6 月に締結した。

○2019 年(令和元年)度は7件の外国人もしくは海外研究機関研究者・海外大学博士取得者による講演会を行い、国際的研究ネットワークの構築及び同講座所属の学生に国際的日本研究の教育を実施している([添付 2]国際日本研究講演会ポスター.pdf)。

○上記の国際的研究教育活動の成果として以下の点を挙げるができる([添付 3]国際日本研究講座学生の研究活動.pdf)。

- ・学生の受賞(2件)
- ・特別研究員の採用(4件)
- ・学生の査読論文(5件)
- ・学生の研究発表(31件)

特に、中村元東洋思想文化賞(第5回(2019年度))の受賞は、対象となった研究が学術面のみならず文化的にも意義のあるものであったことを示している。

 [添付 1]タマサート東北 NIDA シンポジウム報告.pdf,  [添付 3]国際日本研究講座学生の研究活動.pdf,  [添付 2]国際日本研究講演会ポスター.pdf

4. SDGs 研究における企業との連携

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進 計画

SDGs に関する研究教育領域において、新たに三井住友海上との包括的な連携を検討していく。本研究科は、今年から MS&AD インシュアランスホールディングス株式会社の寄附による寄附講義「プロジェクトリスクマネジメント論Ⅱ」を開講しているが、これと関連して、同グループの関連会社である三井住友海上との共同研究実施に向けて調整を行っている。例えば、SDGs の達成のための社会的なニーズの高い研究テーマを決め、クロスアポイントメント制度を利用して関連研究所の研究員を短期雇用の共同研究者として受け入れることを想定している。

また、東北最大手リサイクル企業である青南商事との共同研究をスタートさせ、次世代リサイクル産業の創出のための社会実験(小型家電、廃プラ、次世代自動車などのリサイクル)を実施する。そして、東北大学「廃プラの学際学術研究拠点」に中心的な役割を果たすべく、廃プラの適正処理と再資源化の社会的なニーズを吸い上げて、まず、東北地域の各自治体(SDGs 未来都市、宮城県など)・産業界(MS&AD グループ、青南商事、Dow Chemical、ヨシムラなど)・NGO(SDGs とくほく)との連携・共同研究を推進していく。最終的には、研究科の附属機関として産学官連携による「SDGs 学研究センター(仮称)」の設立を目指す。

実績報告

○MS&AD インシュアランスホールディングス株式会社(以下、MS&AD)の寄附により、2019年度後期に集中講義の形式で寄附講義を開講した([添付 1]寄附講義プレスリリース.pdf)。このような企業による寄附で授業を実施することは本研究科初めての取組で、本研究科の産学連携活動の先鞭をつけた。企業や国際機関からの講師により、様々なリスク、SDGs 事業が紹介され、受講者にとって学術界ではなく「現場」の知識を得る機会となった。

○上記寄附講義は『東洋経済 ACADEMIC—SDGs に取り組む大学特集』(2020年7月9日発行)において東北大学の人材育成の取組みとして紹介された。

▷ **SDGs達成に向けた高度の知を創出し、グローバル人材を育成する**

[東北大学大学院国際文化研究科 劉庭秀 教授]

国際文化研究科では、MS&ADインシュアランス グループ ホールディングス株式会社とMS&ADインターリスク総研株式会社の寄附を受け、寄附講義「プロジェクトリスクマネジメントII」を開講。社会におけるさまざまなリスクとその対策、持続可能な開発をキーワードに、リスクマネジメント理論を中心に専門家による高度知識を提供する。また、民間企業や国際機関におけるSDGs活動の事例を紹介し、国際課題への意識も高める。









○MS&AD との共催により、2019 年 10 月に第6回 G2SD-SDGs ワークショップを開催した([添付 2]20191011_G2SD_WS.pdf)。学内のみならず学外(高校教員、企業、市民団体など)からも出席者(合計 55 名)があり、受講後のアンケートでは回答者の 72%が「とても興味深かった」、28%が「興味深かった」と回答し、好評を博した。

○本研究科教員が、**ダウケミカル日本(株)と共同で東松島市の赤井小学校で出前授業**を行なった(2019 年 9 月 24 日)。地元紙2紙に取り上げられ、社会的に注目された([添付 3]赤井小学校出前授業_石巻日日&石巻かほく.pdf)。

○本研究科教員が、**NGO 団体である SDGs とうほくのイベントに参加し、2件の講演**を行なった(2019 年 7 月 27 日、11 月 10 日、[添付 4]SDGs とうほくイベント.pdf)。1件目は新聞に取り上げられ、社会的に注目された([添付 5]「SDGs とうほく」河北新報オンラインニュース.pdf)。

○MS&AD と東北大学との包括的連携協定の締結を目指し、学内の関連部署・担当理事との検討を開始した。(2020 年 5 月、MS&AD よりコロナの影響により検討を凍結したいとの申し出があり、現在包括連携の検討は中断している。寄付講義は継続。)

 [添付 1]寄附講義プレスリリース.pdf,  [添付 2]20191011_G2SD_WS.pdf,  [添付 3]赤井小学校出前授業_石巻日日&石巻かほく.pdf,  [添付 4]SDGs とうほくイベント.pdf,  [添付 5]「SDGs とうほく」河北新報オンラインニュース.pdf,  東洋経済_国文研 1.png

5. 国際コース「言語総合科学コース」のカリキュラムの改訂

No.03 ②-2 大学院教育の充実

計画

本研究科の国際コースの1つである言語総合科学コースのカリキュラムについて、科内の他のプログラムとの整合性や基盤教育の充実化の観点から点検した結果、倫理教育関連科目を必修科目として加えることにし、それに応じて修了要件となる科目群の単位数の見直しを実施する。令和元(2019)年度 10 月入学者から新しいカリキュラムを適用する。

具体的には、**必修科目群に「研究のための倫理(英語)」(Research ethics)を加え**、従来からある「言語科学概論」(Introduction to language science)と「言語研究法」(Research method in linguistics)と合わせて、6単位を要件とする。それに合わせて、演習科目の必要単位数を8単位から6単位に変更する。

改訂の内容は以下の通りである。

	改定前	改訂後
Basic subjects (必修科目)	4	6
Core subjects (選択科目)	18	18
Seminar (演習科目)	8	6
合計単位数	30	30

実績報告

○計画通り、改訂を行なった。([添付 1]IGPLS_MC 募集要項.pdf)

○これにより 2019 年度入学者から「研究のための倫理(英語)」科目が必須科目となり、研究活動の基盤となる倫理教育を徹底することができる([添付 2]研究のための倫理シラバス.pdf)。

○2019 年度は同授業を言語総合科学コースの学生 2 名を含む 4 名が履修した。授業評価では、「How satisfactory was this course?(どの程度満足したか)」という問いに対して、履修者全員が「Very (大いに満足した)」と回答し、高い評価を得た。

カリキュラム改訂.png, [添付 1]IGPLS_MC 募集要項.pdf, [添付 2]研究のための倫理シラバス.pdf

6. 若手外国人教員の新規採用

No.09 ①-2 多様な教員構成の確保

No.28 ①-3 優れた若手・女性・外国人研究者の積極的登用

No.48 ③-3 外国人教員等の増員

計画

・2020(令和2)年4月の採用となる新規の採用人事(言語科学研究講座)を行う予定である。外国人、若手、女性のいずれかの採用を目指す。

実績報告

○2019(令和元)年度6月の教授会で選考委員会を立ち上げ、7月に公募を開始した。選考の結果、最終的に外国人教員(赴任時 36 歳・准教授)を採用することとなった。

○本研究科及び本学の外国人教員比率・若手教員比率の向上に貢献する。

○当該教員は、全学教育外国語科目(英語)を担当し、また研究科内では言語科学研究講座に加え、国際コースの言語総合科学コースも担当する。研究科及び本学の国際教育に貢献する。

7. EU 諸国を事例とする共生社会研究

No.01 ①-1 現代的課題に挑戦する基盤となる先端的・創造的な高度教養教育の確立・展開

No.22 ②-1 経済・社会的課題に応える戦略的研究の推進

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

計画

本研究は、多文化共生社会の研究及び得られた知見の社会還元を目指すものである。多くの移民や難民、特にイスラム圏諸国から人々を受け入れ、多文化共生社会となっている EU 諸国における社会統合のための施策や現状、課題を調査分析し、共生社会構築への学術的寄与を行っている。主にドイツ、さらにフランスとチェコを事例としているが、ドイツ語やフランス語、チェコ語を用いる研究者とイスラム圏研究者が共同し、ホスト社会とゲスト社会双方の視点から現状を検証している。

これまで、東北大学高度教養教育開発推進事業(平成 27(2015)年度～平成 29(2017)年度)「グローバル共生社会の理解を重視した、高校における非英語外国語教育導入プログラムの開発:ドイツ語・フランス語導入を通しての多文化社会 EU の理解」や科学研究費補助金基盤研究(B)(平成 29(2017)年度～令和 2(2020)年度)の補助を受け実施してきている。

得られた知見をもとに、高大接続事業や高校における非英語外国語教育への貢献を志向している。また、本研究科「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムや災害科学安全学国際共同大学院における教育にも資することを視野に入れている。

令和元(2019)年度は以下の計画を立てた。

1. 学会での発信: 日本ドイツ学会でのフォーラム開催
2. 高校での出張授業: 平成 28(2016)年度からの継続事業
3. 映画上映会: 多文化共生を題材にした様々な国の映画上映会。一般市民も参加できる。関連した取り組みの中で 2010 年度から実施しているものを継続実施。

実績報告

令和元(2019)年度の主な実績は以下の通りである。

○学会でのフォーラム開催1件: 「ドイツ・ハレ市における移民難民の社会統合 – フィールドワーク中間報告 –」日本ドイツ学会、2019 年 6 月 30 日。

○招待講演1件: 大河原知樹「ドイツにおける社会統合の理想と現実 – 旧東ドイツハレ市の調査を中心に –」日本イスラム協会、2019 年 10 月 5 日。

○高等学校での出張授業1件: 仙台二華高等学校1年生全クラス 238 名。2019 年 12 月 16 日実施。「多文化社会 EU を知ろう – 『難民』をめぐる現在」という題目で実施。英語圏以外の外国の事情を学習する機会を提供した。参加者の 80%以上から肯定的な評価を受けた。

○映画上映会: 『はじめてのおもてなし』(ドイツ、2016 年)。2020 年 2 月 1 日開催。スタッフを除き 62 名の参加。参加者から「難民が遠い問題ではなく、自ら考えるべき課題であることに気づいた」など多くのコメントが寄せられた。毎年楽しみにしているリピーターが多く、次回開催への期待も寄せられた。多文化共生という概念を市民を含めた参加者と共有することができた。